

寂庵淨福

瀬戸内寂聴



文化出版局

寂庵淨福

定価九八〇円

昭和五五年七月二〇日第一刷発行

著者 瀬戸内寂聴

発行者・大沼 淳

発行所 文化出版局

〒151 東京都渋谷区代々木三の二の一

振替 東京二一九五六七〇番

電話(〇三)三七〇—三一一(代表)

印刷所 カバー 文化カラー印刷

本文 凸版印刷

製本所 大口製本

目次

祈りの場

(一) 正月の客

一六

(二) 春隣

三一

(三) 雛ひいなの頃

四七

(四) 花まつり

六七



(五)草餅

八四

(六)牡丹の宿

九五

(七)紫陽花供養

一一三

(八)八十八夜

一二八

(九)桔梗と美女

一三九

(十)火の祈り

一五九

(十一)月と土

一七七

(十二)秋麗うらら

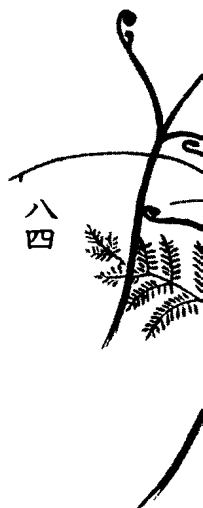
一九五

(十三)柚子の里

二一三

(十四)雪清浄

二二九





祈りの場

逢う人毎によく訊かれて、もううんざりするの、なぜ出家したのかということ、朝は何時に起きて、どういう日課です、すのすかということだ。

テープに吹きこんで答えをつくっておきたいくらいで、そういう質問をする人とはその後、何の話もしたくなくなってしまう。

私は一日に一度は寂庵にいれば持仏堂で祈りの時を持つ。大体、朝起きてすぐだけれど、つい昨夜のつづきの仕事に早くとりかかりたい時などは、お祈りは後廻しになることもある。



朝夕、二度の勤行ごんぎょうをしたいと思ひながら、なかなかそれは果せていない。

持仏堂は小さいので、ひとりて祈るのに丁度いい。寂庵のどこよりも清浄で静寂な聖域である。持仏堂の小窓からは、嵯峨野が一望に見渡せ、遠い京都タワーまで目に入ってくる。

せまいので、もう壁にも柱にも毎日たく香の匂いがしみついていて、戸をあけて中へ入ると、たちまち全身を香の匂いでつつまれる。

線香と香はいいものを使うようにしている。お経は毎日あげる観音経や般若心経の外に、その日の気分で他のものをつけ加える。陀羅尼だろにをあげることもある。なつかしい有縁の人々の命日には、阿弥陀経を加える。

観音経も阿弥陀経も私は好きなお経だ。

両方ともとても長い。ゆっくりあげると時間をとる。お経とは不思議なもので、最初は何が何やらさっぱりわからず、ただルビを頼りにあげているうち、何となくその心がわかってくるものである。一々、辞書をひいてみたりもしていたが、この頃は、わからないところはわかるまであげていて、その後で本や辞書でしらべてみると、大体意味が当たっているから妙なものだ。

寂庵の御本尊の観音様は靈驗があらたかだということに、訪れる人たちの中で定評が出来てきたようだが、私は祈りは現世利益を願うのは邪道だと思つているので、靈驗があつてもなくても気にはしていない。

けれども出離^{しゅつり}して七年もすぎているのに、まだただの一度も、出離したことを一瞬の間も後悔したことがないというのは、やはり、私の力ではなく、私が無かに守られているからだろうとしか考えられない。

軽率で独断家の私が、よくもこんな一大事をすっぱりととり決め、そのことがすらすらと受けとられ、得度まで何の障りもなく運ばれてしまったということ自体が、今にして思えば、全く不思議としかいいようのないことであつた。

そして、私は毎日の勤行の時に、自分のことは祈らないけれど、何と多くのことを声に出して、祈願しているだろう。

「——さんの病気をどうか治してあげてください」

「XXさんを今の悩みの淵から一日も早くひきあげてください」

「……さんの安らかな成仏をお導き下さい」

そしてその祈りはすべてききとどけられていたと、ある朝ふと、気づかされるのであつた。

私の暮しは、出家する前と変りない忙しさに追われはじめている。しかしそれもみ仏のみ心のままならばと、私はもうあせりはしていない。必ず、おだやかな、私の憧れているような時間をそのうちお恵み下さるだろうと信じている。今このように忙しいのは、まだ私にそういう行をせよとのおぼしめしなのであると受けとることにしている。

疲れた時、心が屈した時、私は自然に持仏堂へ身を置きにいく。

本尊に向つて祈つた後、私は本尊に背をむけ、庭に向つて坐禅をくむ。

その位置から見ると、門から爪先上りの段々になっているため、私の坐つているところは深い山の中にいるような錯覚を呼ぶ。紅葉がいっぱい重なりあい、緑の海であったり、火の海であったりする。どちらの時でも深山にいる気配はくずされない。

枯木の時でも、雪の日でも、その静けさは同じである。

雨の日はまして静寂の極みだ。

私は薄く瞼を落し、坐禅の中に自分をとき放つ。

小鳥の声や、蛙の声や、蟬の声がしても、それは静寂をいつそう深める作用になるだけだ。

寂庵の敷地の中で、この場所に持仏堂を置いたのも、何の予定があつたわけではない。偶然、そうなつてしまつて、その後から門の位置や玄関までの道が決り、さておさまつてみたら、この中がどこよりも静かな場所になつていたということで、その成行きもまた、人間の智慧の外のはからいのような気がしてならない。

持仏堂の幽暗のしじまの中にひそやかに坐っていると、私のまわりには、なつかしい人々の霊が来て、やはりひっそりと坐っている気配が伝ってくる。

彼等は何年たつても、かつて私が最後に見た時のままで年をとつていない。常世とこよの国には年齢

がないのであろう。春も、夏も、秋も、冬もなく、永遠に光りにつつまれ、花々に囲まれ、水がきらめき、小鳥がさえずっている。そして、そこには疲れというものがない。

彼等は若くもならなければ年もとらない。汚辱を忘れた目だけが、たとえようもなく澄んでゆき、それは嬰兒も老人も壮年も同じ清さになっていく。

——ね、そうでしょう。

私はひっそりと彼等に向つていう。声にはならないことばが、彼等の耳には必ず達している手応えがある。

——なぜここへいらつしやるのですか。常世の国の方が美しくて清らかで静かでしょうに。

彼等はひっそりと息をひそめて答えない。

あるいは、私の声は彼等に通じて、彼等の声は、この世の私の耳には聞えないようになっていくのだろうか。

——わかりました。答えて下さらなくていいんです。来たいからいらつしやるのね。あなたたちは全く自由で、どこへでも行きたい所へ一瞬にして飛んでいけるのですよね。それにしても、こうしてここへいらつしやるのは、やはり、いく分かはここが気に入っていらつしやるのでしょうかね。ええ、あの過去帳にひかえたあなたの命日には月々お経をあげています。わかつていらつしやるのでしょうか。あなた方あちらの人々には、何もかもお見通しなんです。もし、知ってら

つしやるなら、私がいつそちらへ行くことになっているのか教えて下さらないかしら。いいえ、どうつてこないんです。ただあらかじめ知つておいた方が、見苦しくない出発が出来ましょう。何の支度もいらないうて……そりやそうでしょうけれど、やはり、遺言の一通や二通書いておきたいじゃありませんか。無意味ですつて……そう、そういうえ、あなた方だつて、みんな唐突にそちらへ行つてしまわれましたものね。こちらからそちらへの境いには何があるのでしょうか。深い谷か、高い山か、それとも火の河と氷の河が並んでいるのでしょうか。

あなたたちが、ここがお氣にめしているように、私もここが大好きです。ここにこうしてひとり坐っている時、ふと、私は、もう常世に移つていのではないかしらと思うことがあります。常世もたぶん、こういう澄明な空氣のみちた、耳の中にたえず冷たい水が流れているような静寂につつまれたところなのでしょう。

私のとりとめのないお喋りを彼等がうるさがりも厭がりもしていない証拠に、彼等はやはり身じろぎもしない静けさでひっそりと坐りつづけている。

目の片すみにぼうと黄金の色に群れていた一重山吹の花びらが、はらはらとまばたきよりも静かな幽けさでしんと散っている。青い苔の上に散りしいて、そこがまた黄金の光りの暈かきになつている。

幽かなもの、幽かなものは、苔に散る一重山吹の花びらの軽さ、ひらききつた牡丹の花びらの

風とのささやき、うこんぎくらの今朝のおとろえ、水晶の念珠に映る風の足あと、蟻のなみだ、そしてそのどれよりもほのかなあなたたちの気配。

鐘が鳴りはじめる。鳴りつづけていて、そのある時、ふつとそれに気づく。二尊院か、いえ、あだしの念仏寺か、それともあれは、常世の、あなたたちの世界からの鐘の音ではなかっただろうか。

長崎で買った薄いびいどろの小さな鐘を、沙羅の小枝にかけたまま、忘れていたのが、ふと、ちりりと鳴っています。こわれもしないで、やはりあれも幽かなもののひとつでしょう。

もしかしたら、ここは、このほの暗い翳^{かげ}にみちた小さな空間こそ、常世に入る入口なのではないでしょうか。ああ、それだから、あなたたちは、そんなにも無造作に、いつでもここに來ては坐り、気がついたらまた気配も残さずかき消えてゆくのでしょうか。

そんな大切な秘密に、なぜ私はこれまで気づかなかつたのか。毎日毎日、こうしてここに坐りに來ているくせに。

止観、坐禪、冥想、メデイテーション……。

どんな呼び方でもいい。常世と通いあえる一瞬の永遠が私の中をかけぬけていく。

その法悦の一時がすぎれば、私の肉体は空になって、今日のびきつた若竹のようにすがすがしいうつろがひろがっている。



うつろの中にはやがて充されるもののさえざえとした字感がある。

私はまた、この静寂の中でひとり墨の香をまきちらしながら、経を写している。

岡本かの子は経本も見ず筆をとるなり、普門品のすべてを一字の誤りも脱落もなく、一氣呵成に書きあげたという。今、その写しの一卷がここにある。生命にあふれた、躍るような、それでいて優艶なかの子の字は、かの子観音経として永遠に遺すに足るすばらしいものだ。字のいたって稚拙な、そうしてとてもまだ書きなくては書く自信もない私は、一字一字見たしかめながら、ひたすら勤直に写すしか能がない。

かの子観音経のように巻物にするようなものでもない。ただ人のために祈りをこめて写したお経を本尊に捧げた後は、庭の土を掘り地下に埋めておくのだ。紙は土に還り、経のことはも土の血肉に吸収されてしまう。

寂庵の庭の苔も花も草々も、お経で肥えた土の生気を吸い、なおいつそう生命にみちみちて育つていく。

これが浄土か。ここが常世か。

私は冥想からようやく心身を解き放ち、ゆらりと立ち上る。

深夜、ただひとり、私はそこに坐ることがある。灯明もつけない。月明が火燭よりも明るくさしこみ、そこは深い海底のように思われてくる。

新しく献じた香の匂いだけがしめつた夜気にひろがり、木々の霊の間をす速く駈けていく。

苔も、花も、木の葉も、草も、深夜は霊の相をあらわにして、そのあたりにひしめいている。

月明の夜は彼等の霊も浮かれたすのであろうか。

時折気まぐれな雲が月の面をかくし、闇が魔女のマントのようにひろがっても、私の冥想は破られることはない。

石の声も聞えてくる。石にも心があると石が呻く。

長く生きたと思う。生きるということは多くを傷つけることだ。他を傷つけ、他を殺し、その命を自分の血肉としなければ人は生きることが出来ないとするば、人が生れるということがすでに罪を負うということではないだろうか。懺悔滅罪のために、人は生きつづけるのであろうか。

この世でより、あの世の方に、すでになつかしい人の数が多くなっている。祈るとは自分を無にして常世からの彼等の声を聞くことかもしれない。

今日も祈りの時を持てることを感謝しなければならない。

小魚の頭を噛みくだき、草の根をかじり、木の若芽をもぎとつて人はこの世にあるかぎり生きつづければならない。

地獄は遠くなく、人の生きるまわりであらう。鬼はわが心のうちに棲む。

得度の後に与えられた横川の行院での、この世と隔絶した行の時間がなつかしい。